

国際教育支援活動への参加が教職志望学生の意識変容に およぼす影響

門田理代子*
中島憲子* 續木智彦** 黒川哲也***
海野勇三**** 鐘ヶ江淳一*****

抄録

本研究の目的は、教職課程に在籍する学生が、「体育振興」を基盤とする国際教育支援活動に参加することによって、彼らの意識にどのような影響をおよぼすのかを明らかにすることであった。対象としたのは、『カンボジア教育支援プロジェクト』に参加する学生で、このプロジェクトは体育を中心に、カンボジアの教育制度の確立を支援すべく、学生の自主運営のもとで行われている教育支援のボランティアで、平成24年度から行っている活動である。

意識調査は渡航をはさんで二度実施し、意識の変容を明らかにするため、自己効力感に関して行った調査からは、渡航の前後において有意な変化は認められなかった。この項目に関して、初渡航の参加者と、過去に渡航経験のある参加者との間にも有意な差は認められなかった。各教科に対する意識調査の結果からは、体育が「好き」または「得意」であることと、「指導の自信」との間には相関関係が認められた($r=0.59$, $p<0.01$), ($r=0.67$, $p<0.01$)。渡航後に実施した、渡航までの取組みおよび現地活動についての振り返りに関する調査の結果、初渡航者と比較して渡航経験者の主体的な取組みに対する評価が有意に高い結果を示した。また現地での活動を経験した後では、92%の学生が体育指導に対する意識に変化があったと回答しており、プロジェクトに参加し、全ての企画・運営を行って行く中で、教職志望学生たちの「指導」に対する意識に何らかの変化がもたらされている可能性のあることが示唆された。

以上のことから、プロジェクトに参加し、活動を行っていくなかで、自己効力感という尺度には大きな変化は表れないものの、体育指導に対する意識に関しては影響をおよぼしている可能性のあることが示唆された。今後は、具体的にどのような変化があったのかを明らかにするとともに、縦断的に調査を行っていきたいと考える。

キーワード：国際教育支援サポート，体育，教員養成課程，意識変容，自己効力感

* 中村学園大学・中村学園大学短期大学部 〒814-0198 福岡市城南区別府5丁目7-1

** 西南学院大学 〒814-8511 福岡市早良区西新6-2-92

*** 宮城教育大学 〒980-0845 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉149

**** 山口大学 〒753-8511 山口市吉田1677-1

***** 近畿大学九州短期大学 〒820-8513 福岡県飯塚市菰田東1-5-30

The effect of consciousness changes of attend to international cooperation in Education support :Focusing on teacher-training course students

Riyoko KADOTA *
Noriko NAKASHIMA* Tomohiko TSUZUKI** Tetsuya KUROKAWA***
Yuzo UNNO**** Jyunichi KANEGAE*****

Abstract

The purpose of this study was explore of influence to give to the consciousness of the students who registered at the teacher-training course participate in the international supports that assumes promotion of the physical education as a base. The investigation about the consciousness enforced the twice before and after the activity in Cambodia. The result of the test that change of their consciousness about the self-efficacy, a significantly change was not shown. The comparison between the people who went to there for the first time and the twice also showed a similar result about this. As a result of correlation analysis, a meaningful correlation was accepted between “Like” and “Confidence” of physical education. As a result of investigation about the approach including local activity, the people who went to there more than two times was significantly higher than that for the first time. By having experienced the activity in Cambodia, person corresponding to 92% of the subjects were responded that there has been a change about the consciousness of teaching of physical education. From this, participating in the project, in which performs all of the planning and management, that has affected to the Consciousness of teaching.

From the above, to participate in this project and to go to the activities, it was not appeared to significant change in self-efficacy but to the Consciousness of teaching. Hereafter, I think to reveal the contents of the change of consciousness and To continue the investigation for this content.

Key Words : suport of international cooperation for education, physical education, students who registered at the teacher-training course, change in consciousness, self-efficacy

* Nakamura University, Junior College Graduate School 5-7-1 Befu, Jonan-ku, Fukuoka, Fukuoka 814-0198

** Seinan Gakuin University 6-2-92, Nishijin Sawara-ku, Fukuoka, Fukuoka 814-8511

*** Miyagi University of Education 149, Aoba, Aramaki, Aoba, Sendai, Miyagi 980-0845

**** Yamaguchi University 1677-1, Yoshida, Yamaguchi-shi, Yamaguchi 753-8513

***** Kinki University Kyushu Junior College 1-5-30 Komodahigashi Iizuka, Fukuoka 820-8513

1. はじめに

1) カンボジア教育支援プロジェクトの概要

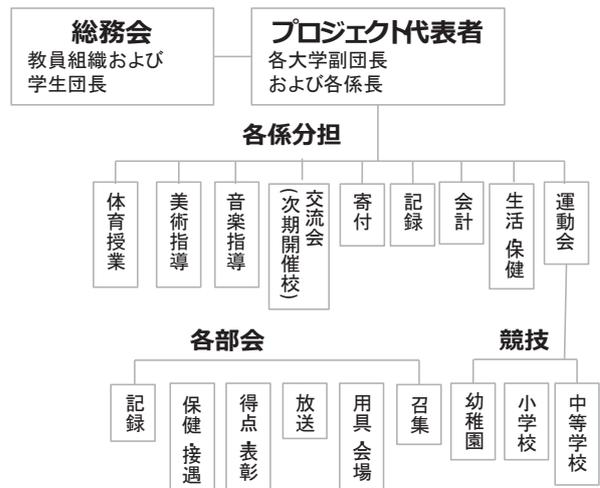
我々は現在、カンボジア北部農村地域に対して、学校体育振興を根幹とした国際教育支援活動を実施している。カンボジアの教育制度は内戦等の影響で、一度は完全に崩壊してしまっており、現在は日本をはじめとする各国からの援助により、教育環境の整備が進められている。しかし、これらの国からの支援の実情は、学校建設やカリキュラムの作成などにばかり目が向けられており、完成した教育カリキュラムを遂行できる人材、物理的な環境などの整備はかなり遅れている。都心部を一步出ると、ほとんどの地域では体育の授業などは、ほぼ行えていない状態である。我々が行っている教育支援プロジェクトでは、カンボジア教育の本当の意味での成立を推進すべく、プロジェクト参加学生とともに日本国内での準備活動から、カンボジアでの現地活動に至るまで、さまざまな方向から現地の教員・生徒・児童そして地域の人々に働きかけている。

プロジェクトの主な活動は、日本国内における準備活動および現地へ実際に渡航して、国内で準備した計画を実行する現地活動とに分けられる。国内においては、週に一度の会議を行い、月に一度は参加大学が集合し、全体での会議を行う。現地活動における最大のイベントは、運動会の開催であり、その運営から指導法に至るまで、多面的にサポートしている。このプロジェクトの利点は、単発のボランティアではなく、支援校に対して継続的に支援を行うことで、運動会や体育授業を自主運営できるところまでをサポートしていく仕組みになっていることである。この中で学生たちは、これまでの自身の経験を、大学で専門的に学んだ知識を最大限活かして、支援の中身を企画し、さらに現地での活動を運営することとなり、支援を行うなかで、教員としての資質だけでなく、人間としてのさまざまな成長が期待されるプロジェクトである。

図1. プロジェクトにおける多年度支援の内容

- 1年目: 児童生徒・教職員との運動遊戯を用いた交流
 - ⇒ 思い切り体を動かし、集団で競い合う楽しさの実感
- 2年目: プロジェクトスタッフによる運動会の企画・運営
 - ⇒ 全校による体育行事の素晴らしさ・教育的価値の感得
- 3年目: 体育行事運営に関する教員研修会の開催
 - ⇒ 体育行事運営に関する専門性と実践的指導力の獲得
- 4年目: 高学年児童および教職員の運営への参加
 - ⇒ 高学年児童を組織して教職員の分業と協業による運営体験
- 5年目: 高学年児童および教職員による自主運営
 - ⇒ 教職員集団による自主的な企画・運営・総括

図2. 平成27年度プロジェクト組織体制



2) プロジェクト参加学生の意識変容

このプロジェクトの大きな魅力として、単位化されたプログラムではないことで、大学・学部・専門の壁を超えて、普段は関わることのできない人々と交流できることが挙げられる。この中で学生たちは、さまざまな考え方に触れ、自分自身の考え方を見つめなおすきっかけを得る。また、現地活動のなかでは、現地の生活や教育の現状に触れることで、教育を受けることが当たり前のこととして育ってきた学生たちにとって、教育の原点を考える機会がうまれる。日本で学ぶ中では、どのように教えよう？と考えることはあっても、これを学ぶ必要があるのだろうか？と考えることはほとんどないのではないか。このような疑問をもつことで、教職志望の学生の考え方におよぼす影響は計り知れない。そこで本研究においては、このプロジェクトに参加する中で、学生たちの教育に対する意識がどのように変化するのかを明らかにしていきたいと考える。

また、学校教育のなかの「体育」という教科に着目してみると、この教科は他教科と比べても「好き・嫌い」が非常にはっきりしている教科である。胡らの報告によると、体育が「好き」または「得意」であることと、体育指導に対する自信との間には相関関係が認められている。つまり、体育が決して得意ではない、もしくは嫌いな学生にとって体育指導は、教員になるにあたって大きな不安要素となっている可能性がある。そこで、体育振興を根幹とするプロジェクトに参加し、主体的に活動していく中で、体育指導に対する意識に影響をおよぼすかどうかを検証していきたい。このプロジェクトメンバーは、教職課程に在籍する参加者が大部分を占めている。しかし、体育という専門教科があつて、その中で同

時に小学校教諭の免許を取得する者や、専門教科がなく、小学校や幼稚園免許、保育士資格を取得する者、さらに、教職課程とは異なる課程で学ぶ者など、多種多様である。これらの人間が一つのプロジェクトを進めていく中で、各教科に対する意識に変化は現れるのかを明らかにしていきたい。

2. 目的

本研究では、学校体育振興を根幹とするカンボジア教育支援プロジェクトに参加した学生を対象として、1年間の日本国内における準備活動や実際の現地活動を経験することで、学生たちの意識にどのような変化がもたらされるのかを、明らかにすることを目的とする。

3. 方法

1) 調査対象

平成27年度カンボジア教育支援プロジェクトに参加する学生（大学1年生～大学院1年生）50名を対象とした。なお、このプロジェクトでは学生の参加の形態として、活動の一環として現地へ渡航し、実際に現地活動の運営をする参加者、現地への渡航はしないものの、日本国内で計画する現地活動に向けた計画や国内で可能な準備等で協力する参加者が含まれている。今年度プロジェクトでは、平成27年11月および平成28年3月の二回に分かれて現地活動を実施するため、カンボジアへの渡航者も分散しており、本稿においては11月期に渡航した学生（36名）の回答を中心に調査結果を報告する。意識調査は各係への配属が決まって、具体的な活動を開始した8月下旬、および現地への渡航から帰国し、振り返りおよび次期への引き継ぎ作業の行われた12月下旬の二回にわたって実施した。

2) 調査内容

I. 各教科に対する好嫌についての質問項目

小学校で取扱いのある各教科について、「1：嫌い」から「4：好き」までの4件法で尋ねた。さらに「体育」に関しては、器械運動、陸上、水泳、ボール運動、表現運動の5領域に関してそれぞれ詳細に好嫌の度合いを尋ねた。

II. 実技系教科における得意・不得意の意識および指導に対する自信についての質問項目

音楽、図画工作、家庭科などの教科に関しては、体育と同様に実技をとまなう授業が大半を占めて

いるという点において類似した教科として位置付けられる（実技系科目）。そのため、体育を合わせた4教科について小学校までに学習する技能に関しての自身の習得度合いを「1：不得意」から「4：得意」までの4件法で尋ねた。また同教科について、小学校で取り扱う内容の指導に対してどの程度自信があるかという質問に対して、「1：自信がない」から「4：自信がある」までの4件法で尋ねた。

III. 自己効力感に関する質問項目

対象者の多くは、教職課程に在籍する学生であり、教育支援ボランティアに参加し、さまざまな活動に取り組む中で、自己効力感が高いことは活動に取り組むうえでも、将来的な資質としても非常に有益であると考えられる。そこで本研究においては、成田らの自己効力感尺度を参考に、参加時点での各々の自己効力感を6件法で尋ね、さらにプロジェクトのメインプログラムである現地渡航を終えてからも同様の質問に回答してもらい、自身を評価してもらった。

IV. 現地渡航を含む、自身の取組みに関する質問項目

大学は高等教育を学ぶ場所でありつつ、社会人としての資質を養うための最終的教育現場でもある。経済産業省は、社会人基礎力を「職場や地域社会の中で多様な人々と共に仕事を行っていくうえで必要な基礎的な能力」と定義している。教育支援プロジェクトでは、このような社会人としての基礎的な資質の成長も期待されるため、現地活動を含めた渡航までの取り組みを社会人基礎力として必要な能力と関連させながら振り返るかたちで質問項目を作成し、6件法にて回答してもらった。さらに自身の成長点、国内活動における準備の過不足、指導に対する意識などに関して自由記述により回答してもらった。

3) 統計処理

渡航の前後における意識の変容を明らかにするため、対応のあるt検定を用いて分析を行った。また、専攻教科の有無の違いによる学生の意識の比較に関しては、対応のないt検定を用いて分析を行った。さらに実技系科目に関しては、それぞれの教科に対する「好嫌」と「得意・不得意」、「指導の自信」に関しては、それぞれの関係を明らかにするため、ピアソンの相関係数を用いて分析を行った。

4. 結果及び考察

1) 各教科に対する意識と指導に対する意識調査
平成27年度カンボジア教育支援プロジェクト
発足に際して実施したアンケート調査から、体育を
専攻する学生（以下、専攻あり学生）と小学校教諭
や幼稚園教諭、保育士など専攻する教科のない学生
（以下、専攻なし学生）の、教科に対する意識を比較
したところ、「好嫌」の項目に関しては、「体育」
および「家庭科」に有意な差が認められた（表1）。
家庭科に関しては、専攻あり学生の多くが男子学生
である一方、専攻なし学生のほとんどが女子学生で
あったために、専攻あり学生が有意に低い値を示し
たと考えられる。「体育」に関しては、専攻あり学
生全員が「好き」と回答しており、専攻なし学生と
比較して有意に高い結果を示している。ただし、運
動歴を尋ねたところ、全体の90%が過去に3年以上
の運動経験を有しており、体育振興を掲げている
プロジェクトに参加する学生の多くは体育という
専攻教科の有無にかかわらず、「体育」を好意的に
とらえているようである。

表1. 各教科に対する好嫌の比較

	専攻あり(体育)		専攻なし		値	有意確率
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
国語	3.5	0.67	3.0	1.04	1.38	n.s.
社会	3.0	0.85	3.0	1.04	0.12	n.s.
算数	2.9	1.16	3.2	0.78	0.90	n.s.
理科	3.2	0.83	2.4	1.18	1.97	n.s.
生活	2.9	0.90	2.5	0.88	1.46	n.s.
音楽	3.3	1.14	3.5	0.59	0.60	n.s.
図工	3.2	0.94	3.6	0.65	1.56	n.s.
家庭科	2.6	0.79	3.5	0.78	3.16	*
体育	4.0	0.00	3.5	0.66	2.61	*

「体育」に関してさらに詳細に、領域ごとの好嫌
をたずねたところ、器械運動、陸上、水泳、表現運
動に関しては、両者の間に有意な差は認められず、
ボール運動にのみ有意な差が認められた($t=4.24$,
 $p<.05$)。この結果を受け、「体育の好嫌」と「ボ
ール運動の好嫌」の関係を明らかにするため、相関係
数を求めたところ、両者の間には有意な相関係数が
認められた($r=0.74$, $p<.01$)。このことから、ボ
ール運動の好嫌意識が「体育」という教科自体に対
して抱く印象に大きな影響をおよぼしていることが
明らかとなった。

また「体育」に関して、小学校までに取扱う技能
レベルで得意・不得意をたずねたところ、専攻あり
学生が有意に得意であると回答していた($t=4.38$,
 $p<.05$)。また、体育の指導に対する自信につ
いてたずねたところ、専攻あり学生が有意に高い値
を示した($t=2.40$, $p<.05$)。この「好嫌」、「
得意・不得意」、「指導の自信」に関して相関分析
を行ったところ、

「好嫌」と「指導の自信」の間 ($r=0.59$, $p<.01$)
および、「得意・不得意」と「指導の自信」の間に
相関関係 ($r=0.67$, $p<.01$) が認められた。この
ことから、胡らの報告と同様に本研究における対象
者も、「指導の自信」と「好き」「得意」なこととの
間には相関関係があることが明らかとなった。やはり
体育を専攻する学生は体育が「好き」であり、「得
意である」という意識を抱いており、それらの意識
は指導に対する自信につながっているようである。
同じ実技系の教科である音楽、図画工作、家庭科に
ついては同様に尋ねたところ、それぞれの教科に関
しては有意な差は認められていない。専門性のある
ことは強みではある。指導の自信に関しては、今回
渡航前後の変化を分析できていないため、3月の渡
航終了時に、11月渡航者と併せて調査を行う予定
である。

2) 渡航前後における自己効力感に関する調査

自己効力感に関する調査の結果、プロジェクト始
動時と渡航を終えて一週間経過時の値に有意な差
は認められなかった。この自己効力感を向上させる
要因として Bandura は、「成功体験」、「代理体験」、
「社会的説得」、「生理的・感情的状態」の4つの主
要な情報を基に構成されると述べている。その中で
最も影響力の高い要因は「成功体験」であるとされ
ており、渡航までの取り組みや現地での活動の中
での確かな強度の目標設定ができていなかった可能
性がある。その他にも現地で活動するなかで、何が
できれば成功であったのかを自己で判断することが
できていなかった可能性などが考えられる。今回の
対象者の中には、以前から同プロジェクトに参加し
、すでに複数回渡航の経験がある参加者もいた。そ
のため、複数回の渡航経験者と、初めて渡航した学
生の自己効力感を比較したが、両者の間に有意な差
は認められなかった。これらの結果からも、自己効
力感は、それほど単純に向上するものではないの
かもしれない。今回、渡航の前後ともに調査を
実施できた人数が12名と非常に少数であったこと
も有意差の示されなかった結果に影響している
と考えられる。有意な変化は認められなかったもの
、各質問項目の平均値自体には向上傾向が示され
ており、今後も継続的にこのプロジェクトに参加
し、的確な目標設定の機会を作りながら活動を
進めていくことで、自己効力感に変化をもたら
す可能性は十分にある。そのため、的確な水準
の目標設定だけでなく、いくつかの段階に区切
って、それぞれの段階における小目標の達成
、つまりいくつかの成功体験を重ねていける
ように、また何をもって目標が達成できた

表2. 渡航前後における自己効力感の比較

質問項目	渡航前		渡航後		t値	有意確率
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
1 自分が立てた計画は、うまくできる自信がある。	3.3	1.1	3.8	0.8	1.46	n.s.
2 しなければならぬことがあっても、なかなか取りかからない。	4.2	0.8	3.8	1.2	0.62	n.s.
3 始めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける。	5.2	0.7	5.1	0.9	0.62	n.s.
4 新しい友達を作るのが苦手だ。	2.5	1.0	2.6	1.4	0.17	n.s.
5 重要な目標を決めても、めったに成功しない。	2.8	0.8	3.0	0.9	1.00	n.s.
6 何かを終える前にあきらめてしまう。	2.2	1.1	2.3	1.0	0.00	n.s.
7 会いたい人を見かけたら、向こうから来るのを待たないでその人のところへ行く。	4.7	1.4	4.8	1.6	0.17	n.s.
8 困難に出会うのを避ける。	2.7	1.4	3.3	1.5	1.53	n.s.
9 非常にややこしく見えることには、手を出そうとは思わない。	3.5	1.7	3.3	1.5	0.43	n.s.
10 友達になりたい人でも、友達になるのが大変ならばすぐに止めてしまう。	1.8	0.7	2.2	1.3	0.60	n.s.
11 面白いことをするときでも、それが終わるまでがんばる。	4.8	0.8	4.8	1.2	0.00	n.s.
12 何かをしようと思ったら、すぐにとりかかる。	3.9	1.3	3.9	1.5	0.00	n.s.
13 新しいことを始めようと決めても、出だしでつまずくとすぐにあきらめてしまう。	3.1	1.4	2.5	0.8	1.20	n.s.
14 最初は友達になる気がしない人でも、すぐにあきらめないで友達になろうとする。	4.2	1.0	3.5	1.3	1.53	n.s.
15 思いがけない問題が起こった時、それをうまく処理できない。	3.5	1.2	3.0	1.4	1.72	n.s.
16 難しそうなのは、新たに学ぼうとは思わない。	2.6	1.4	2.5	0.7	0.41	n.s.
17 失敗すると、一生懸命やろうとする。	4.9	1.1	4.5	1.3	1.03	n.s.
18 人の集まりの中では、うまく振舞えない。	3.4	1.7	2.8	1.3	1.60	n.s.
19 何かしようとする時、自分にそれができるかどうか不安になる。	4.7	0.9	4.3	1.4	0.86	n.s.
20 人に頼らないほうだ。	3.1	1.1	3.2	1.2	0.16	n.s.
21 私は自分から友達を作るのがうまい。	3.5	1.2	3.6	1.4	0.22	n.s.
22 すぐにあきらめてしまう。	2.5	1.1	2.3	0.8	0.71	n.s.
23 人生で起きる問題の多くは処理できるとは思えない。	2.5	1.5	1.8	0.9	1.30	n.s.

のか、という具体的な目標設定をしっかりと自らに課すようにサポートしていきたいと考えている。

3) 自身の取組みに関する振り返り

渡航を含むこれまでの取組みに関して、厚生労働省の提唱する社会人基礎力向上のための観点を参考に、それらの要素と自身の取組みを絡めて振り返ってもらったところ、初渡航者と過去に渡航経験のある者の間に、主体性に関する項目に有意な差が認められた(項目 1 : $t=3.21$, $p<.05$, 項目 2 : $t=2.80$, $p<.05$; 表 3)。経験を重ねる中で、人から指示される前に、自身がすべきことを理解できる能力が養われているのではないだろうか。渡航経験者の多くは、各係を統率する側の立場として活動に取り組んだものが多く、彼らには目指す目標がしっかりと立てられていて、見通しをもって活動に取り組んでいたようであった。その一方で、活動をけん引する役割を担う立場に立ったことで、情報を発信する機会是非常に多かったと考えられ、発信力や傾聴力に関して力不足を感じた者が多かったようである。これらのことを彼ら自身が低く評価したことから、一度決めた目標に縛られず、ひとつの課題を達成するたびに新たな課題を自分に課すことができている可能

性は高い。その根拠として、経験者は、初渡航者と比較して、高い目標を設定して、自分に課すことができたと評価したものが多く、さらに課題発見力が高かったことから、しっかりと課題意識をもって取り組めたようである。人が成長するためには、自分に対してできなかった、失敗したという点も含めて、評価を行い、できなかった課題を再度達成すべく自身にフィードバックしていく必要がある。何か困難にぶつからない限りは、人はそのことに気づくことはできないが、プロジェクトに参加し、このような機会に恵まれたことで、彼らは無意識のうちにそのような能力を身につけていっているのかもしれない。これを繰り返すことで、今回の短期的な結果には現れなかったが、人としての大きな成長につながっていくと考えられる。初渡航者の、主体性や実行力などに関する項目で低い値を示したことから、活動に参加するにあたって、しっかりとした目標をもって、その課題解決のために活動に取り組むという意識が低かった可能性が高い。今後、プロジェクトを運営するうえで、これらの点に留意し、参加者たちそれぞれが成功体験を実感できるような仕組みを構築していく必要があると感じている。

表3. 活動の振り返りに関する渡航経験者と初渡航者の比較

カテゴリー	質問項目	初渡航		過去に渡航あり		値	有意確率
		平均	標準偏差	平均	標準偏差		
主体性	1 人に指示される前に自分のやるべきことを理解できた	3.0	1.3	4.9	1.1	3.21	*
	2 自分のやるべきことを行動に移すことができた	3.9	1.4	5.0	0.5	2.80	*
働きかけ力	3 周囲の人々を励まし、気持ちを奮い立たせるために積極的に働きかけた	3.4	1.2	4.3	0.9	1.77	n.s.
	4 目指す目標を明確にし、周囲の人々を巻き込みながら動かすことができた	3.3	1.4	3.7	1.0	0.64	n.s.
実行力	5 成功と失敗のギリギリの高い目標を設定し、自分に課すことができた	3.0	1.1	3.7	1.0	1.42	n.s.
	6 目標達成のために粘り強く行動した	3.7	1.0	4.1	0.6	0.96	n.s.
課題発見力	7 常に冷静な視点で物事をとらえることで、課題を見つけることができた	4.1	1.2	4.6	1.2	0.92	n.s.
	8 課題を見つけたらそれを指摘し、解決方法を提案することができた	4.2	1.1	4.0	1.1	0.44	n.s.
	9 ある課題に対していくつかの解決策を考案し、失敗したときの対処法なども含めて計画することができた	3.1	1.2	3.9	0.6	1.45	n.s.
計画力・実行力	10 いくつかのプロセスの中から最善策を導き出し、効率的に課題を解決することができた	3.8	1.2	4.0	0.8	0.44	n.s.
	11 失敗に対しては、他のプロセスへ切り替えることで臨機応変に対処することができた	4.3	0.9	4.4	0.7	0.23	n.s.
創造力	12 取り組んでいることに関連する情報は徹底的に模索した	3.3	1.4	4.0	0.9	1.21	n.s.
	13 新しい試みも、よいと思えば積極的に取り入れるようにした	5.0	0.9	4.7	0.7	0.70	n.s.
発信力	14 自分の意見を分かりやすく整理した上、相手に理解してもらえようという目的で伝えることができた	3.9	1.4	3.3	0.9	1.04	n.s.
傾聴力	15 相手が話しやすい環境をつくることを常に心がけた	4.5	1.1	4.7	1.0	0.42	n.s.
	16 自身の考えに対して意見を求めるときには、自分から質問を投げかけたりした	4.1	1.5	3.9	1.2	0.29	n.s.
柔軟性	17 自分の考えをしっかりと持ちつつ、新しい考え方ややり方を積極的に理解しようと努めた	4.3	1.2	4.6	1.2	0.53	n.s.
規律性	18 ルールや人との約束を守って行動した	4.6	0.8	4.9	1.0	0.74	n.s.
状況把握力	19 状況に応じて自らすべきことを判断して行動した	4.2	1.1	5.0	0.5	1.81	n.s.
規律性	20 周囲の人たちに対してもきまりを守るよう促した	2.8	1.0	4.4	1.2	3.23	n.s.
ストレスコントロール力	21 活動していく中で感じるストレス源への対処法を考えたり、ストレスを感じずにやり遂げられる方法を考えようとした	3.8	1.4	4.6	1.5	1.22	n.s.
	22 困難なことがあった場合「大変」「辛い」と思わずに、前向きに考えるようにした	4.7	1.2	3.6	1.5	1.78	n.s.

5. まとめ

本研究の目的は、学校体育振興を根幹とする教育支援活動に参加することによって、学生たちの意識にどのような変化がもたらされるのかを、明らかにすることであった。調査の結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 体育を専攻する学生は、体育が「好き」、「得意」であり、そのことが指導に対する高い「自信」につながっている。
- 2) 渡航前後における自己効力感に有意な差は認められず、さらに初渡航者と渡航経験者との間にも有意な差は認められなかった。
- 3) 渡航後の振り返りに関して初渡航者と、渡航経験者との間には、主体性に関わる項目に有意な差が認められた。

今後は、平成28年3月に予定している今年度二度目の渡航者および、年度の終わりに際して再度調査を実施し、より詳細に調査結果を報告するとともに、調査を継続していきたいと考える。

胡泰志, 古谷嘉一郎. 教職志望大学生の体育に対する意識に関する研究. 北治山大学現代文化学部研究紀要 第17号 97-102, 2010.

経済産業省 社会人基礎力3つの能力/12の能力要素 よ り
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>
 日経キャリア教育.net 社会人基礎力道場
<http://career-edu.nikkeihr.co.jp/contents/all/kisoryoku/about.html>

成田健一, 下仲順子, 中里克治, 河合千恵子, 佐藤眞一, 長田由紀子. 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る—. 教育心理学研究 第43巻 第3号 306-314, 1995.

Sherer, M., Maddux, J. E., Mercandante, B., PrenticeDunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R. W. The self-efficacy scale: Construction and validation. Psychological Reports, 51, 663-671.1982.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。



参考文献

Bandura, A. Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. Psychological Review, 84, 191-215, 1977.